

一方、最後の乾隆大蔵経は、いずれの巻も良質の稲わら紙である。稲わら遺物が散見されるが、ライプツィヒ刊本のわら紙と異なり、藍染糸片は一切なく、薄い清白紙である。乾隆大蔵経は“宣紙”を用いて印刷されたことが伝えられている。この宣紙は稲わらを使った宣紙といってよい。清朝では、宣紙も、原料の青檀の不足から、稲わらを多く含むか、あるいはすべて稲わらからなる宣紙が作られたというが、乾隆大蔵経はその典型であろう。竹紙の脆さと経年変化とに弱いことを意識しての、上質紙へのこだわりがあったのかもしれない。

ライプツィヒ刊本が竹紙ではなく、乾隆大蔵経よりも劣るがわら紙（＊）を使ったのは、竹紙のもろさが、ヨーロッパの活字印刷に適さなかったことをよく分かっていたのかもしれない。

当時の中国からヨーロッパへの紙の輸出、需要のあり方を清一欧貿易の歴史から調べる必要がある。乾隆帝の時代は、清朝はヨーロッパとの交易を日本に比べはるかに多角的に展開していた。当時、サイズの大きな紙ができなかったヨーロッパ各国は、中国の“rice paper”と俗に呼ばれる、宣紙を大量に輸入し、王侯貴族の屋敷の壁紙として珍重していたという。ライプツィヒへの紙もまた、この交易回廊に乗り、同種の“わら紙”が輸出されたことを示すのでないか。

＊校正にあたっての追加

本稿講演後、ライプツィヒ刊本と同年代の清朝刊本（東洋文庫蔵）数点の用紙から、大麦花穂の遺物が複数個所で認められた。紙原料として、稲に加えて大麦も、混合または単独で用いられていると考えられる。他の諸本についてもさらに分析が必要である。

東洋文庫善本叢書所収本の料紙調査報告

石塚 晴通

（東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授）

1. 2013年9月11日～9月13日調査

・『歴代地理指掌図』 上等ではない竹紙（不明繊維交ル）

・宋版経の内

（小帙収納帖）『経律異相』巻四十二 竹紙，生経巻四 竹紙

（大帙収納断片）8a『阿毘曇毘婆娑論』巻一 竹紙，13a 阿毘達磨藏頭宗論巻八 高麗梶紙

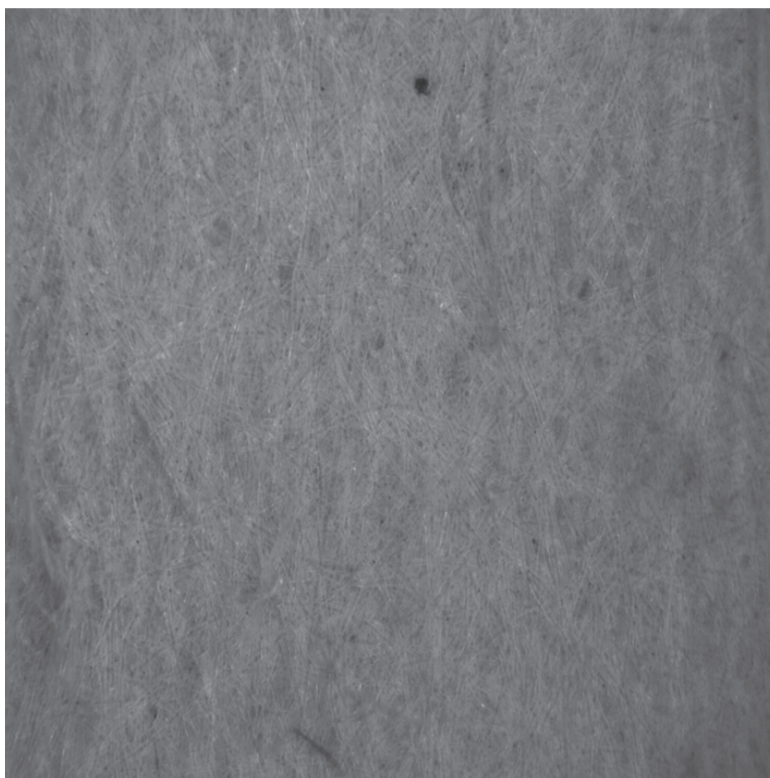
（函収納帖）『阿毘達磨毘婆娑論』巻十四 竹紙（刷圧高く初期刷）

同じ版でも印刷時期が異なることを紙で証明（先後は版本の磨滅度，刷圧等で判断）

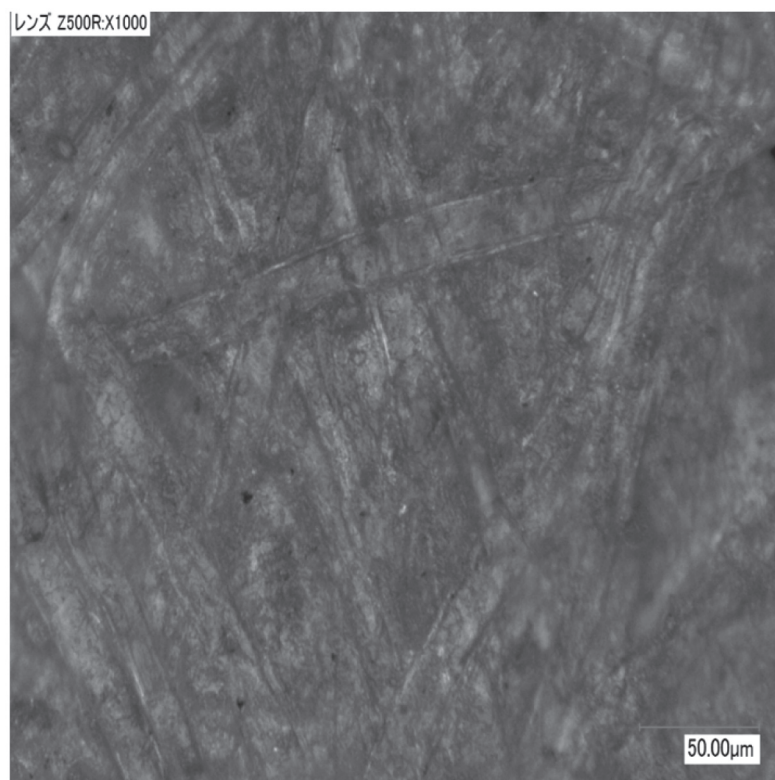
・006『大般若経』巻四十五 竹紙，013『大樹緊那羅王所問経』巻一 竹紙，030『仏説最上根本大教王経』巻七 竹紙（中程度質），032『長阿含経』巻二 竹紙，022『生経』巻五 竹紙，026『大般若経』巻二百二十七 竹紙，027『開元釈経録』巻九 竹紙（刷圧低く後刷）

・『梵語千字文』

100倍写真から、モルフォロジー（紙の表情）が良く窺われ、溜め漉きであることが歴然としている。9世紀の（中国写本で）日本写本ではない。内藤湖南・高楠順次郎以来の平写初期写本説は距りぞけられる。

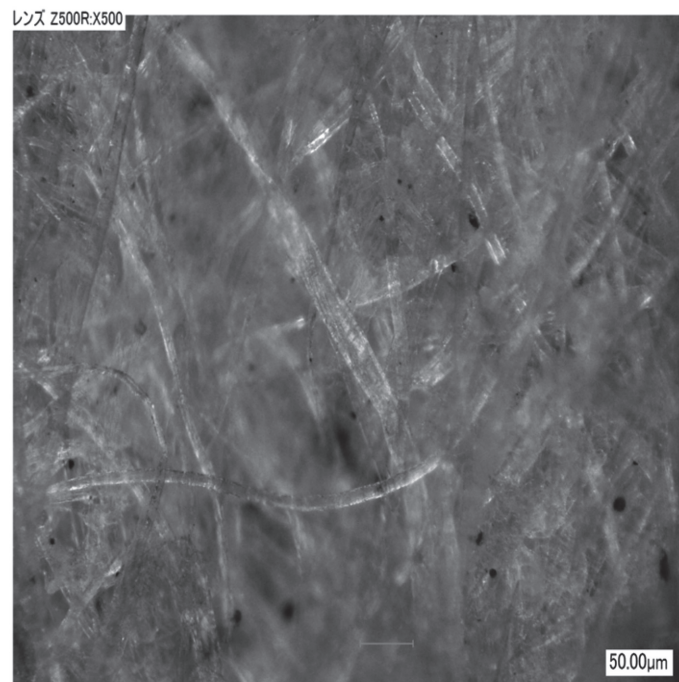


(画像1) 冒頭 x100。中国構紙（日本楮紙ではない）。

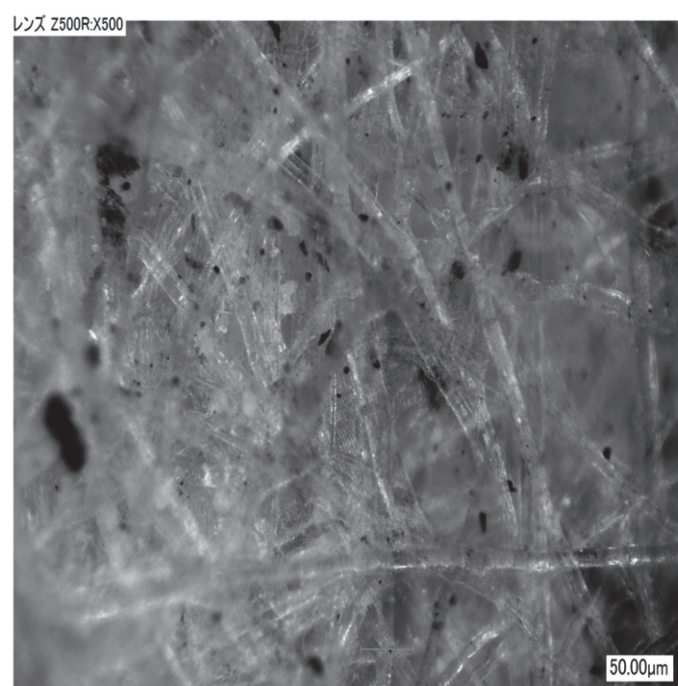


(画像2) 冒頭 x500。繊維の構造（両側の鞘（サヤ）・隔壁）が良く見て取れ、日本の楮紙ではない。中国構紙（天然のカジノキ）と判定。

- ・『スピリツアル修行』（国字写本）雁皮紙（100%）（紙厚 0.07 mm）
- ・（キリシタン版）*Flosculi* 雁皮紙（100%）（紙厚 0.06–0.07 mm）長崎版完成相（墨密）
- ・（重文宋版）『楽善録』1229 刊 卷一本文第 1・3 丁のみ構紙 他は巻一も他巻も竹紙 巻十の 4 丁のみ日本補入（楮紙）

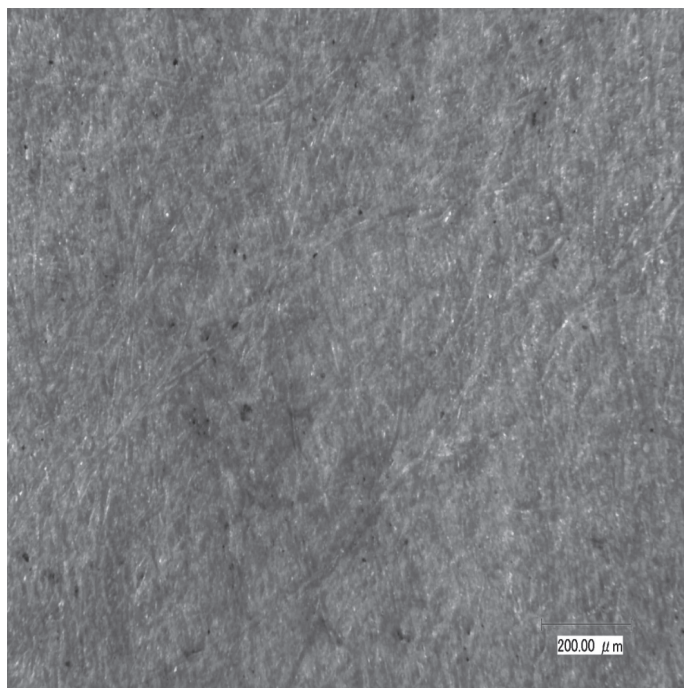


（画像 3）本文 3 丁オ。500 倍写真で，構繊維の構造（両側の鞘・隔壁等）が明瞭。巻一本文第 1・3 丁のみ構紙。

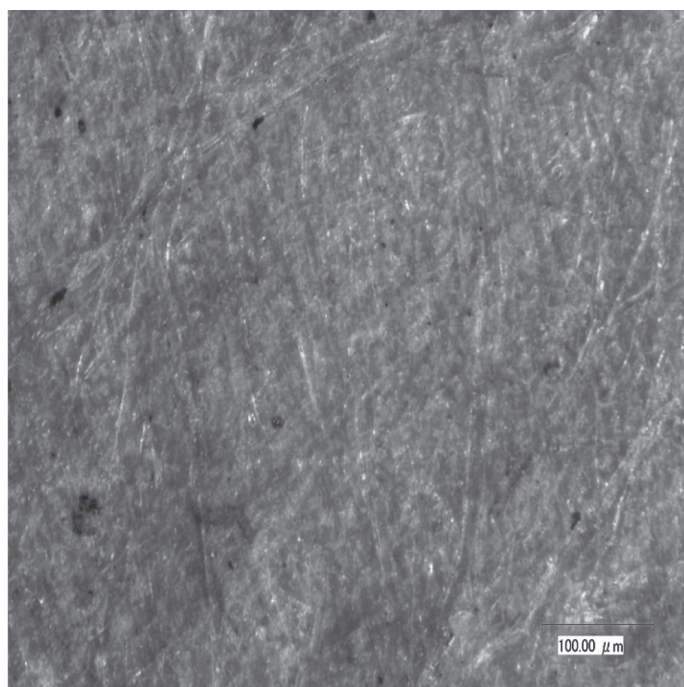


（画像 4）103 丁オ。500 倍写真から繊維の構造（スーっとしている，構・楮の如き鞘なし）から竹紙であることが明瞭。

・(重文キリシタン版)『ドチリナキリシタン』欧州活字・墨粗, 米粉入り, 雁皮紙(100%)(紙厚 0.09-0.1 mm)



(画像5) 扉。200倍写真で、雁皮紙のモルフォロジー明瞭。日本キリシタン版初期相。



(画像6) 扉。500倍写真で、繊維の構造(鞘の薄さ、コブの状態)で明瞭に雁皮(鳥の子)紙である。

調査参加者

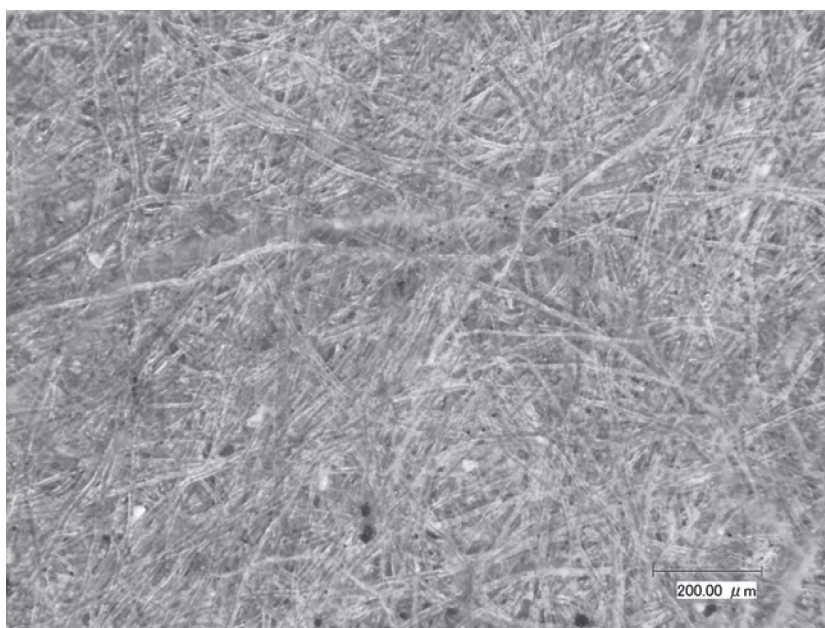
岡田至弘(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター教授), 江南和幸*(龍谷大学名誉教授), 坂本昭二(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター研究員), 豊島正之*(上智大学教授), 石塚晴通*(東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授)

成果を東洋文庫 2013・2014 年度「アジア資料科学研究シリーズ」, 東洋文庫善本叢書解題で一端を披露（方法論の提示）。

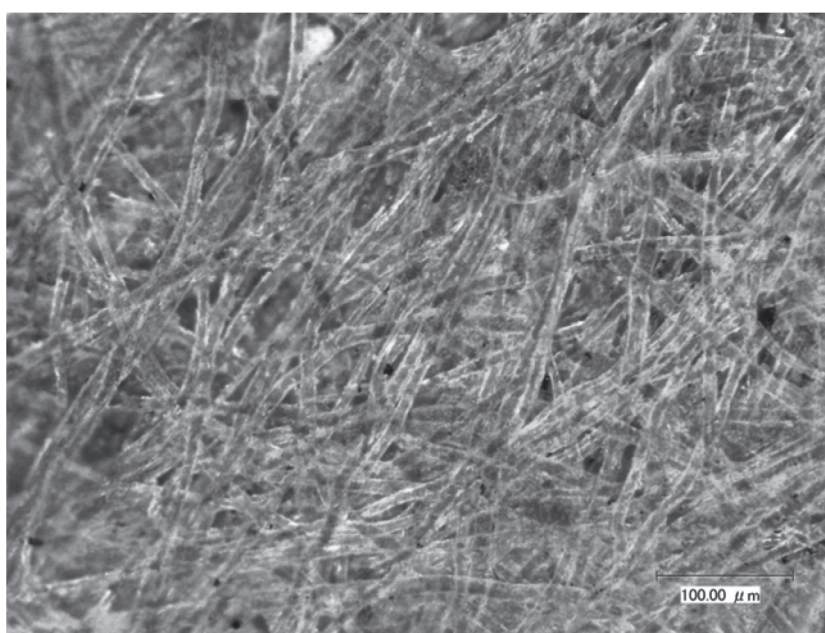
*は, 「アジア資料科学研究シリーズ」講師。

2. 2015 年 11 月 11 日～11 月 12 日

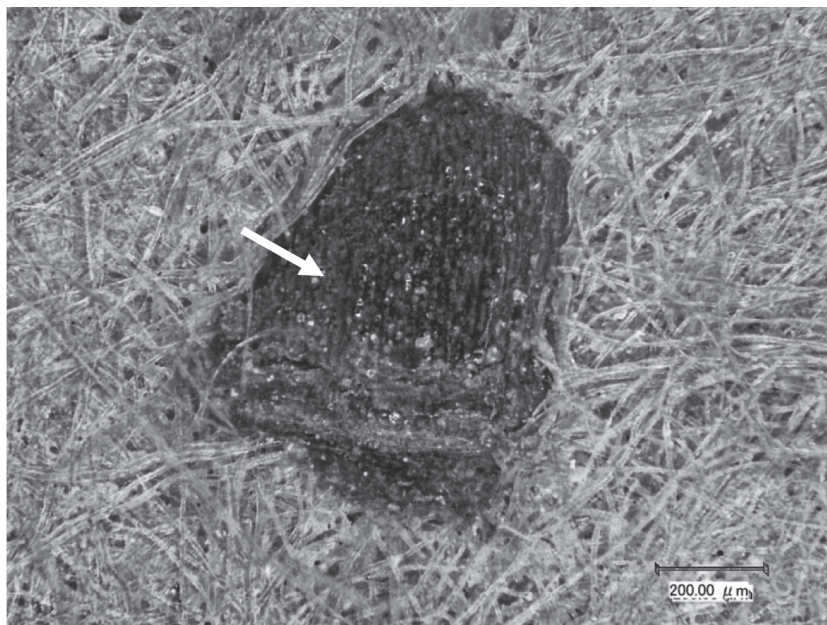
- ・(国宝)『春秋経伝集解』中国製樹皮紙(桑交青檀紙) 清原頼業 家学の確立を期し中国舶来高級紙を使用。保延 5 年(1139)受庭訓了



(画像7) 第2紙11行 matrix x200。中国製樹皮紙(桑交青檀紙)。明らかに溜め漉きの紙。



(画像8) 第2紙11行 matrix x500。日本の楮紙よりもさらに繊維の方向は不規則である。中国の紙である公算が高い。また繊維幅が狭く、構紙繊維の特徴である繊維を取り囲む「鞘」が薄く及び隔壁密度が低いので、構紙ではない。家学の確立を期し、中国舶来高級紙を使用。

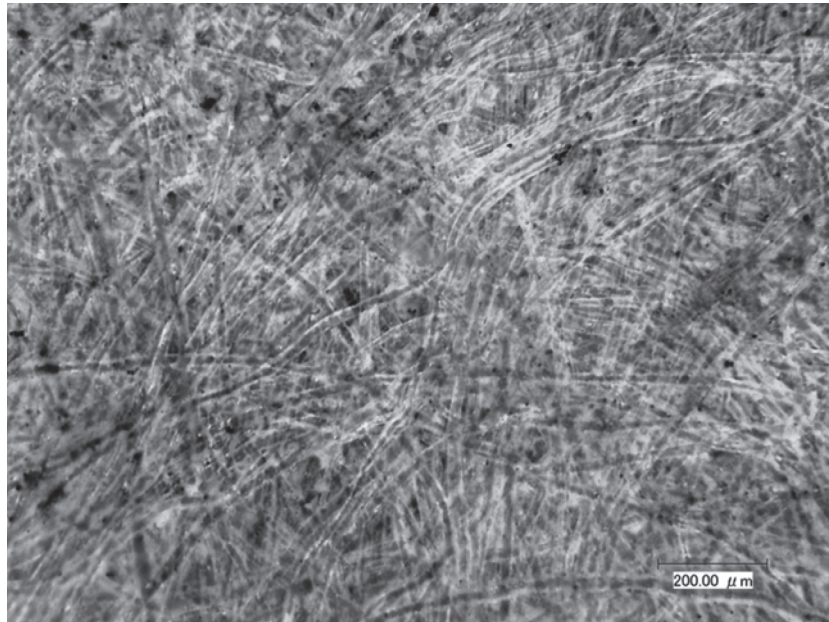


(画像9) 第3紙15行植物痕跡 x200。玉すだれ状組織に特徴がある。青檀表皮遺物。

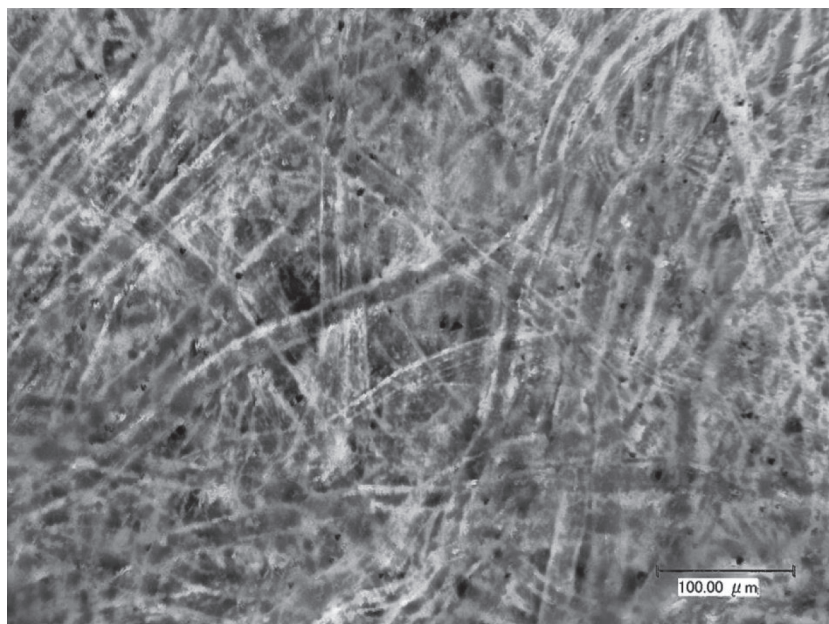


(画像10) 第2紙9行 植物茎痕跡 x200。桑？脈理が途中で二本に分かれてレンズ状になる（ここでは半分だけが残る）のが桑の特徴。

- ・（国宝）『毛詩』 中国製樹皮紙（構紙）

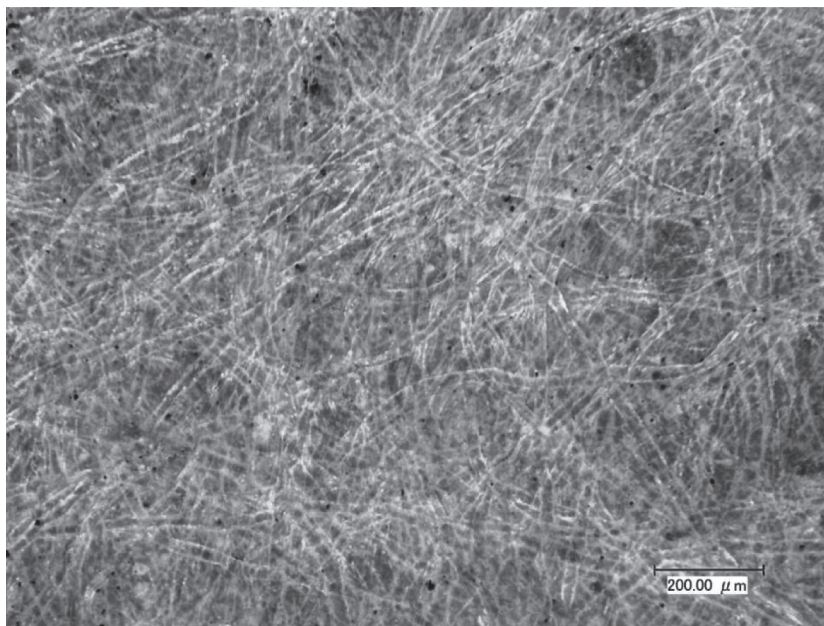


（画像 11）『毛詩』 第 2 紙 1 ～ 2 行 x200。明らかに溜め漉きの紙である。

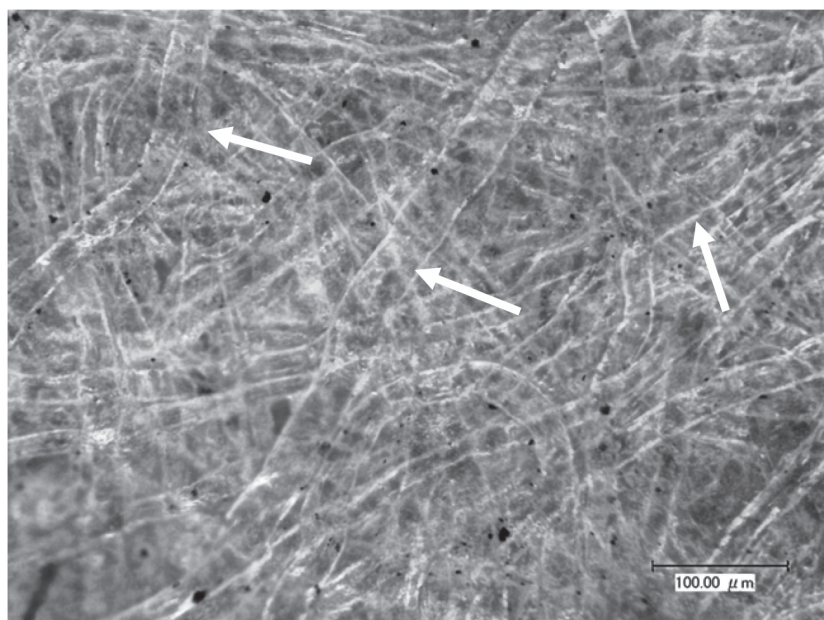


（画像 12）『毛詩』 第 2 紙 1 ～ 2 行 x500。繊維幅が広く、また隔壁 (dislocation) 密度も、宣紙と比べると明らかに低い。繊維も独立しているので、構紙である。これも中国の紙である。

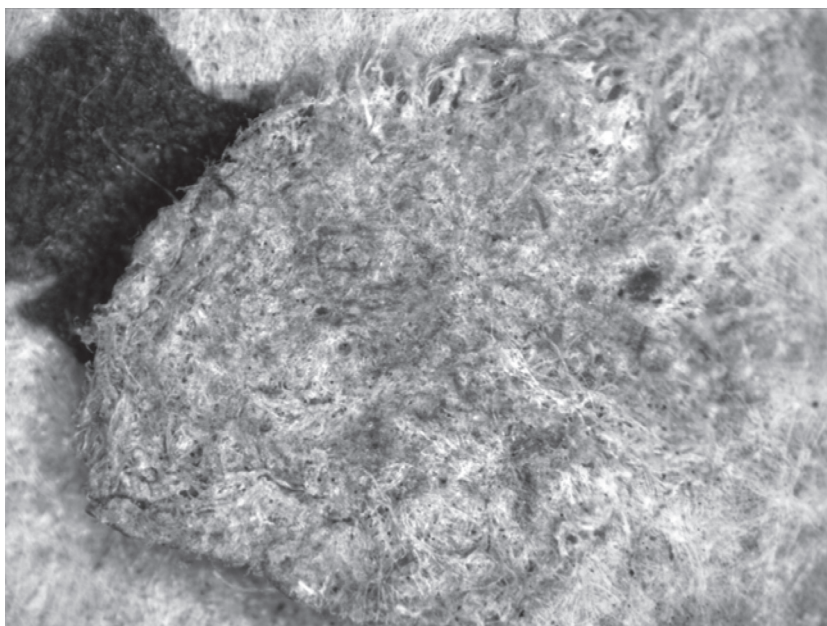
- ・(重文)『礼記正義』中国製樹皮紙(構紙)。青点は麻布片、朱点は樹葉片。



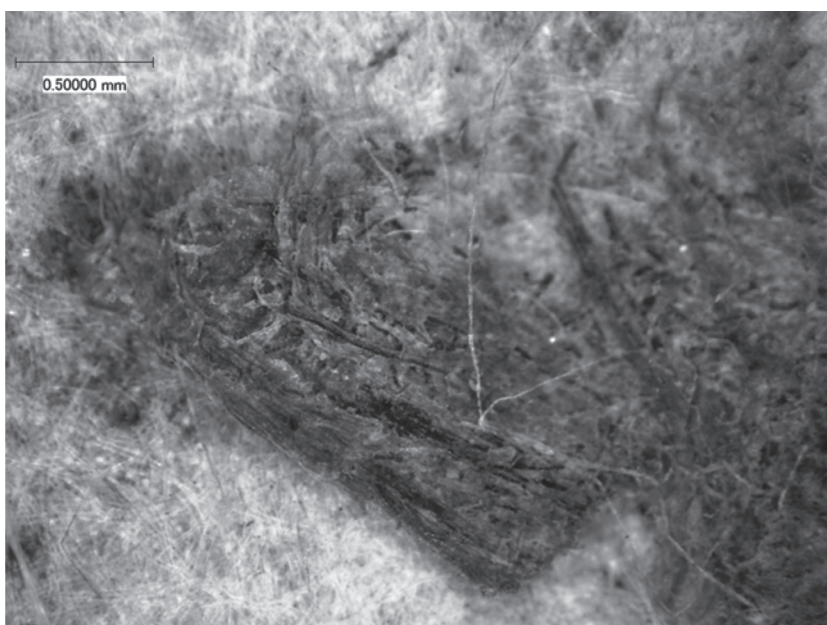
(画像 13) 『礼記正義』第2紙2行上余白 x200。構紙 溜め漉き紙、中国製の紙であることが分かる。



(画像 14) 『礼記正義』第2紙2行上余白 X500。構紙。今ひとつの特徴は、繊維幅がどれも一様に広いことである。打紙が施されていることを示す。

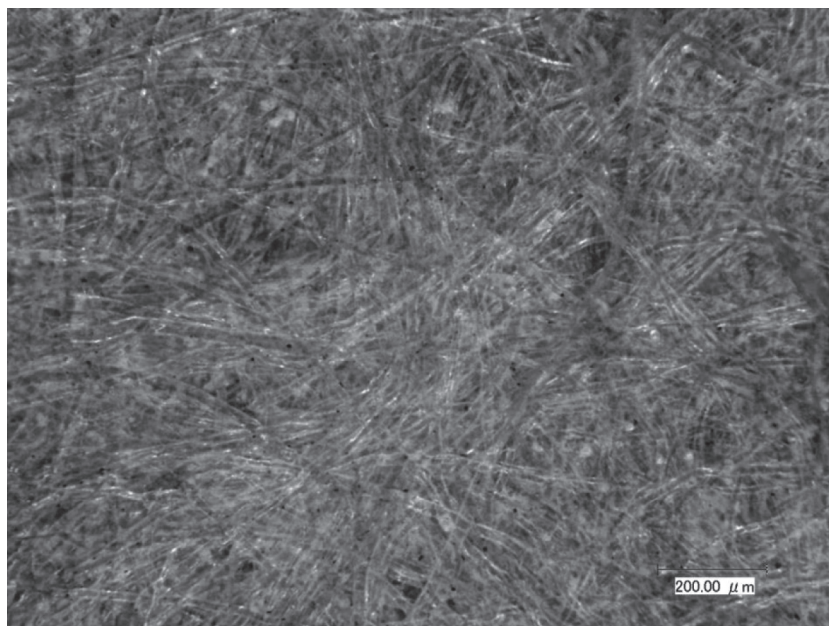


(画像 15) 『礼記正義』第 1 紙 72 行上土字横 藍染布断片 x100。訓点の一種。

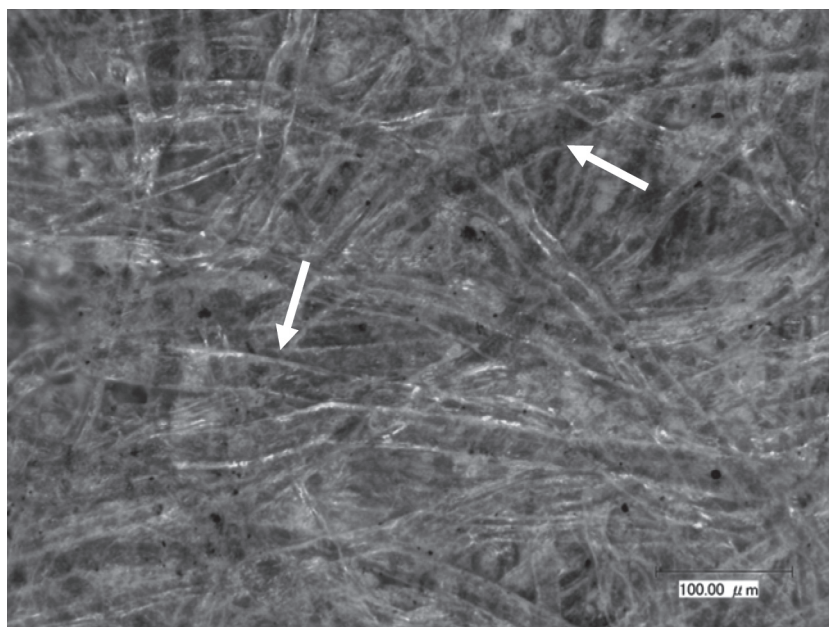


(画像 16) 65 行 収字横褐色断片 x100。葉脈と短毛とがあり，植物葉断片とおもわれる。現在のところ植物の種は特定されない。これも訓点の一種。朱点の一種。

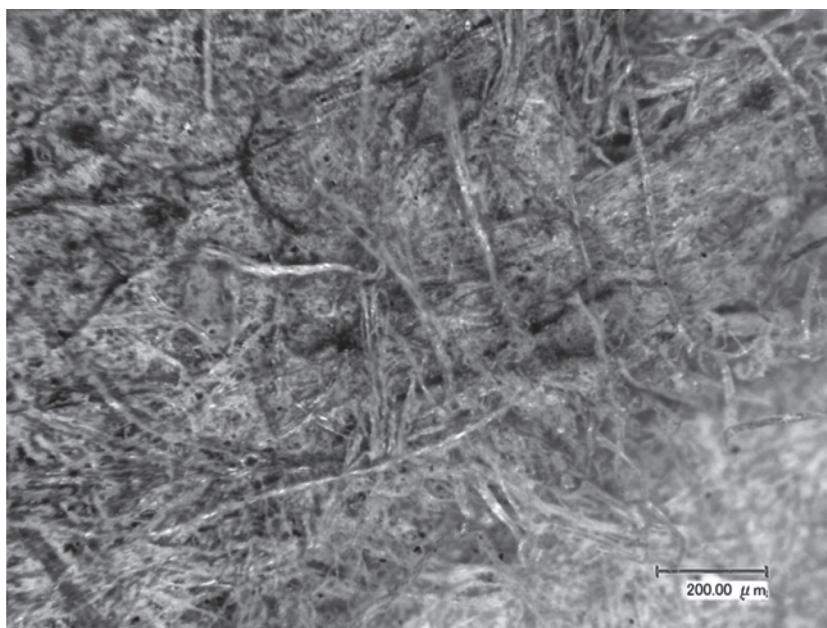
- ・（国宝）『古文尚書』 中国製樹皮紙（構紙）。青点は麻布片。



（画像 17）『古文尚書』 第 2 紙 2 行平字横 x200。構紙。溜め漉きであることはここでも明白。

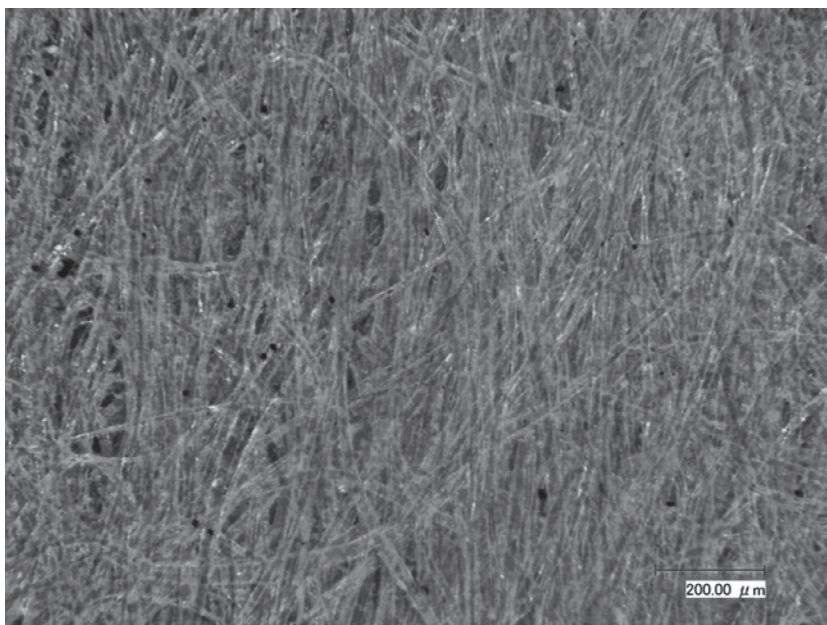


（画像 18）『古文尚書』 第 2 紙 2 行平字横 x500。構紙の繊維であることが明瞭である。繊維密度が大で、幅も広く打紙を施していることが分かる。

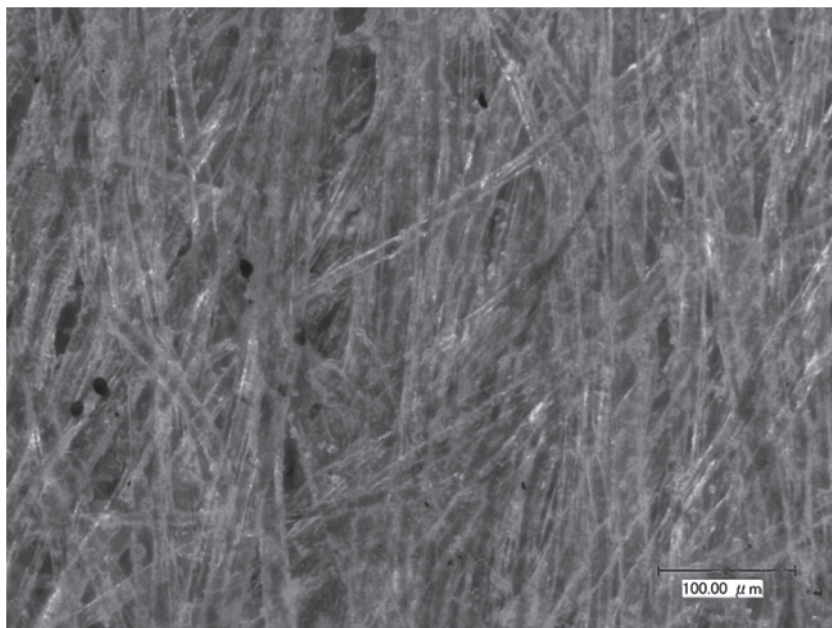


(画像 19) 『古文尚書』 74 行第一字横 藍染布断片貼り付け x200。訓点？延喜年間（900 年頃）の日本加点点以前に中国で加点点（9c ?）。

・（国宝）『文選集注』（卷第八十八）日本製楮紙



(画像 20) 『文選集注』 卷 88 第 2 紙 3 ～ 4 行上余白 x200。繊維方向性が明らか。流し漉き。日本の紙であることは明らか。平安中期以降の上質楮紙。



(画像 21) 『文選集註』 卷 88 第 2 紙 3 ～ 4 行上余白 x500。繊維幅はよく揃い、密度も高く、上質な楮紙である。『毛詩』 第 2 紙など中国の構紙と比べると、日本の楮紙と中国の構紙との違いがよく分かる。

調査参加者

江南和幸（東洋文庫研究員・龍谷大学名誉教授）、石塚晴通（東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授）、篠崎陽子（東洋文庫図書部）、徐 小潔（東洋文庫研究部）

典籍料紙の分析は、コディコロジーの重要な要素。字体・書式（版式）・料紙・受容・本文等の要素の公私・精粗の度合いは比例することが判明しつつある。